

西宮市甲風園採集の弥生式土器

折井千枝子・坂井秀弥

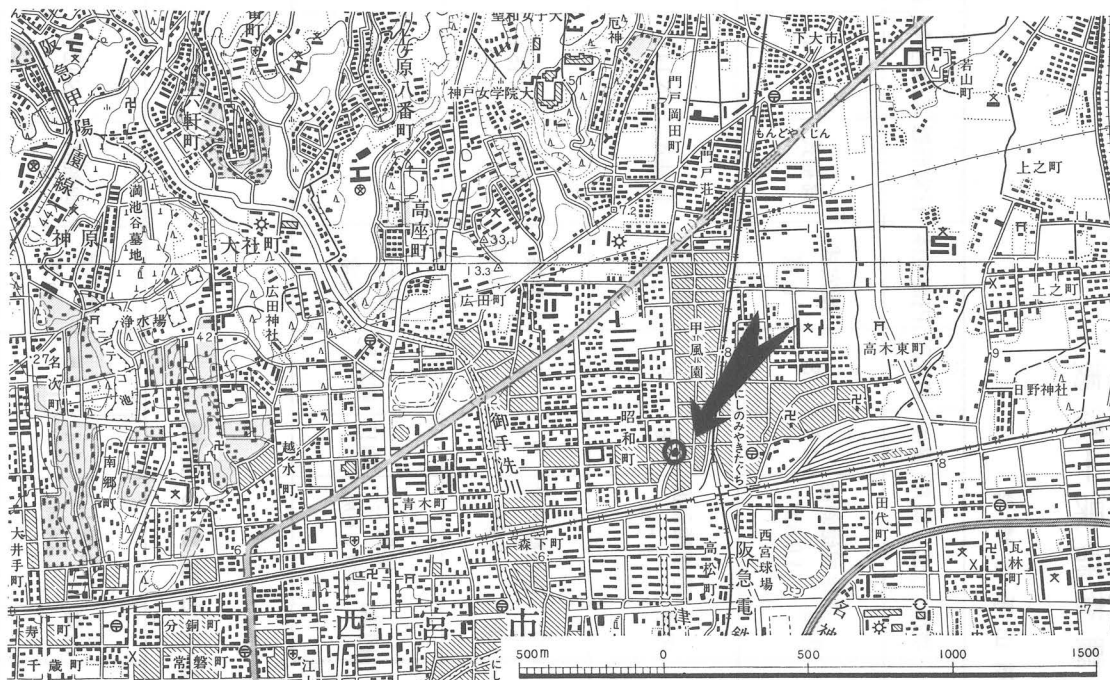
1. 発見の経過

ここで報告する弥生式土器は、昭和41年8月、西宮市甲風園1丁目の増田氏敷地内で採集されたものである。発見の経過について詳細は不明であるが、当地にビルが建設された際、採集されその後当研究会に持ち込まれたものであろう。従来ここには遺跡の存在は知られなく、『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』にも記載されていない。

2. 位 置 （第1図）

採集地点は阪急西宮北口駅西出口のロータリー北方約50mにあり、近年駅前開発によりビルが林立している。地理的環境をみるならば、西摂平野の西端に位置するとともに六甲山系東麓にあたる。東方約1.5kmには武庫川が南流し、西側は約100mで津門川の流れとなり、現在海拔約7mを測る。

一方、周辺の弥生時代前期の遺跡は、武庫川水系では尼崎市上ノ島遺跡、栗山遺跡、床下川川床遺跡、猪名川水系では尼崎市田能遺跡、豊中市勝部遺跡、上津島遺跡などが知られるが、武庫川西岸ではこれま



第1図 弥生式土器採集地点

で弥生時代前期の遺跡は全く確認されていない。同様に六甲山系南麓一帯でもその存在は知られておらず、六甲山系西端に位置する神戸市垂水区播磨吉田遺跡まで、この時期に関しては空白となっている。

中・後期に入ると武庫川西岸の遺跡は、丘陵周辺部に立地する岡田山遺跡、六軒山遺跡、越木岩遺跡や、沖積平野に立地する西宮神社社頭遺跡、津門東芝遺跡（銅鐸出土地）が認められる。

3. 遺 物 （第2図・図版17）

採集された土器は弥生時代前・中期のものが10数点ある。いずれも細片であるが、実測可能なものは12点であった。

(1)は甕の口縁部であり、丸く曲折して外反する。口径は25.2cmをはかる。口縁部内外面は横ナデ。体部内外面は炭化物・煤等の付着が著しく成形手法は不明であるが、無紋であることはわかる。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

(2)は壺口縁部であり、大きく開く厚手のもので、口径21.4cmである。口縁端部は横ナデによって丸くおさめる。口縁部内外面は篋磨きする。色調は淡褐色を呈し、断面は赤褐色に変色する。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

(3)は丸味をおびた壺の体部の上半に篋描き平行沈線をめぐらせたものである。上半の欠損のため平行線の条数は不明であるが、残存する条数は7条である。復原腹径は約42cmである。内面は指圧痕をナデにより消しており、外面は篋磨きする。体部外面には黒斑が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

(4)は壺の口縁部である。大きく開く口頸部をもち、口径は27.8cmである。口縁端部は横ナデし、口縁部内外面はともに篋磨きする。色調は淡褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英粒を含む。焼成は良好である。

(5)は壺の底部になる。底部の内外面には指圧痕を明瞭に残す。体部内面は強くナデしており、粗い条痕が認められる。外面の成形手法は不明。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

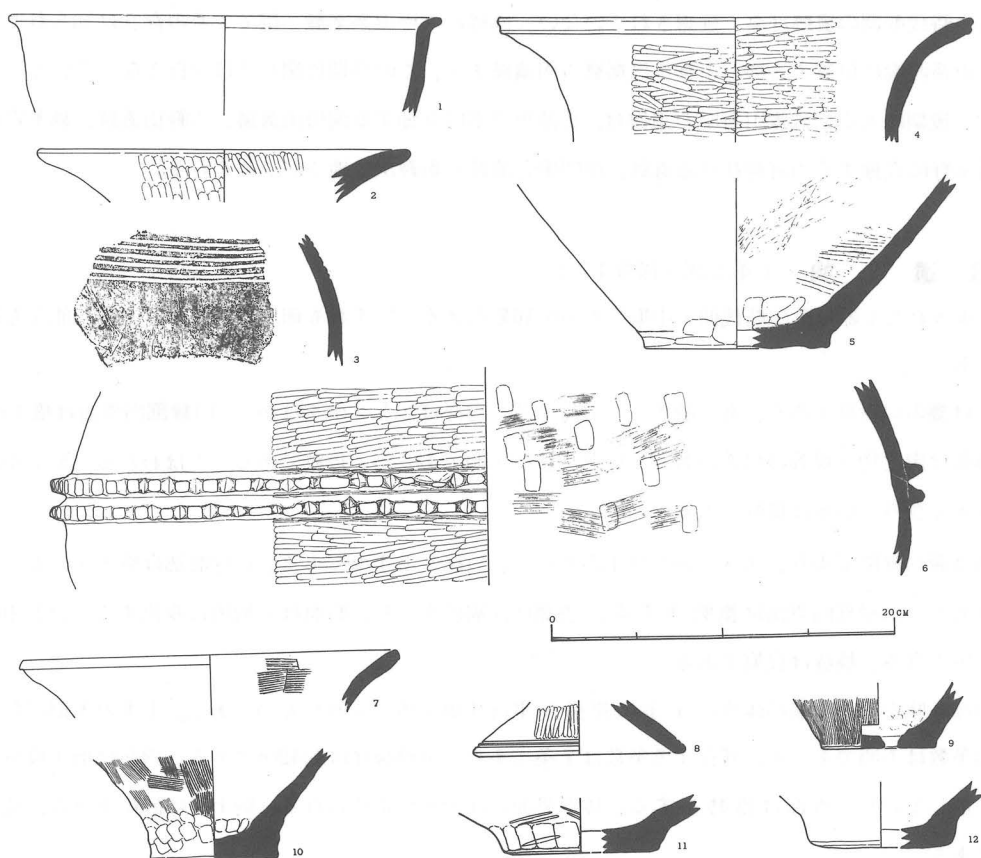
(6)は壺の体部のほぼ中位にあたり最大腹径は約50cmである。2条の貼付突帯をめぐらせたものである。これらの貼付突帯は指圧によって小突起を作り出している。内面はナデによって指圧痕を消し、外面はヘラ磨きする。色調は暗灰色を呈し、胎土中には2～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好である。

(7)は大きく開く壺の口縁部であり、口径は21.8cmである。内面は刷毛後横ナデし、刷毛目を残す。口縁端部から外面は横ナデ。色調は淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。

(8)は径12.0cmの高杯脚部である。裾端部上面に2条の篋描き沈線文をめぐらせる。外面は篋磨きする。内面は剝離のため不明。色調は淡褐色を呈し、胎土は精良である。

(9)は甕底部である。甕底部に焼成後一孔を穿ったものである。外面は縦方向の刷毛目を残し、内面は指圧痕を残す。色調は暗褐色を呈し、胎土中には2～3mmの砂粒を多く含む。

(10)は壺の底部である。やや突出気味の底部内外面には指圧痕を明瞭に残す。体部外面は刷毛目、内面はナデによる調整である。色調は暗褐色を呈し、2～3mmの砂粒を多く含む。



第2図 西宮市甲風園採集の弥生式土器 実測図

(1)は壺底部である。外面は叩き目をわずかに残す。篋磨きによって叩き目を消したものである。内面はナデ、色調は茶褐色を呈し、胎土は精良である。

(2)は壺底部である。内外面ともに表面剝離のため調整手法不明、色調は淡褐色を呈し、胎土は精良である。

弥生時代前期の土器は畿内第1様式(新)段階に相当する。

4. 小 結

出土状況が不明のため遺跡の性格等については論及できない。しかし、遺物の多くが磨滅していないことから、当地に弥生時代前期から中期にかけての遺跡が存在したことが窺われる。とくにここで注目されるのは、西摂地域において武庫川西岸に従来未発見であった弥生時代前期の遺跡が確認されたことである。西摂の地域に最初に成立した上ノ島遺跡と六甲山系西端の播磨吉田遺跡との空白を埋める資料としてとらえられよう。また、六甲山系東麓に点在する弥生時代中期の遺跡との関連においても新たな問題を提起するものであろう。